

「がんになっても終わりではない」

北海道の北見市常国町などを舞台に六月三十日に開かれたサロマ湖百キロウルトラマラソンで、格別な思いを持つてゴールした男性がいる。がんを乗り越えて出場した東京都港区の会員大久保淳一さん(四七)。「百キロを完走するのが目標」。今回の挑戦を闘病生活の支えとしてきた。

サロマ湖100キロマラソン完走

外資系証券会社に勤める大久保さんは二〇〇三年からサロマ湖ウルトラマラソンに出場し、四回連続で完走した。しかし〇七年、睾丸がんを発症、腹部や肺にも転移。手術などに耐えたが、抗がん剤の副作用で生存率は20%以下とされる重い病

病になってしまった。しかし、彼は「坂道を転がっていくような気持ちだった」と、そんなとき、「乳がん」のランニングを再開し、一年間患者がランニングに汗を流しているという記述に勇気づけられた。

「自分も百キロを再び完走したい」。ウルトラマラソンを目指し、全国各地から多くの励ましと応援が寄せられた。

港区の大久保さん



そして迎えたウルトラマラソン。前半は足が重かった。それでも「がんになっても人生は終わりではない」と患者を励ましたい」と何度も自分に言い聞かせ、諦めなかつた。後半になると足が自然と前に出て、ペースが上がった。自身一番目でゴール。勝利を宣言するように両手を天に突き上げた。

決めた。その後、退院し自宅療養を経て〇九年に社会復帰できた。

肺線維症で肺機能の三分の一を失いながら、走できない体力を取り戻す。「患者同士をつなぐ」、「患者を支える」、新たな目標は患者支援。がんに打ち勝った意味をかみしめながら、走できることを喜んでいた。活動に取り組む。

100キロを完走し、喜びの表情を浮かべる大久保さん